イタリアの舞台表現教育の動向と創意
—ロンバルディア州ミラノ県の取り組みを中心に—

中嶋　俊夫

Recent Trends in Education for the Theatrical Expressions in Italy
- Its Joint Programs Promoted by the Local Government and Schools in the Province of Milan, Lombardy -

Toshio NAKAJIMA

はじめに

(1)　音楽的体験を共有する「場」という視点—音楽科教育・教員養成と関わって—

拙論「音楽的体験を共有する場づくりへのアプローチ—初等音楽科教育法授業における学生の取り組みと意識調査を通して」（中嶋2007）において、音楽的体験の共有は２つの「場」の相互連関によって図られることについて考察した。２つの「場」とは、人が物理的な位置関係によって表現者として存在する「現実の場」と、表現のコンテクストと関わる「もう一つの場」である。人と人が体験の共有度を高めるために「現実の場」は、自分と他者が交流する好ましい状況でなければならない。また表現の共有度を高めるためには、表現にともなう解釈やイメージにおいて、つまり「もう一つの場」において共感することが求められよう。どちらの場にも共通することは、自分がそこに身を置いているという「身体性」によって「場」がとらえられるということである。

児童生徒の音楽学習の基盤としてこの「場」をいかに形成し、また活用させるかという視点は、音楽科教育の取り組むべき課題を示している。この視点を教員養成カリキュラムに生かしたいと考え、教育実習の前段階として位置付けられる学校教育課程２年の授業、「初等音楽科教育法」と「教育実地研究」に取り組んできた。「初等音楽科教育法」ではグループ単位で＜歌唱指導体験＞（模擬授業形式）を行うが、グループごとに歌唱指導の目標と題材を決め、指導内容を検討し、メンバー全員が指導実践に関わる。この場合、一人では難しい指導も、メンバーの資質が生かされ、協同して取り組むことによって指導の観点が広がる。身体表現、絵図、場面設定、あそび、イメージなどの活用は、歌唱指導の方法として有効に生かされることを目的としながら、同時に雰囲気づくりや、同じ場にいる者同士の共感を高めようとする意図が働いている。

一方、「教育実地研究」授業の一環として、毎年、本学部附属横浜小学校で＜小学生と大学生の交流音楽会＞を実施しているが、学生たちは子どもたちと友好関係を育みながら、自分たちが構想したストーリーや状況設定を通して児童の興味が喚起され、意欲的な音楽表現が引き出されていくことを体験する。これら学生たちとの実践活動から、表現・解釈が促されて感動体験を共有するために、先述の２つの「場」への働きかけが有効であると考える。

(2)　イタリアの舞台表現教育への視点—音楽言語と関わって—

筆者はこれまでイタリアの音楽教育について研究してきた立場から、近年イタリアの学校で「舞台表現教育」（テアートロ教育）Educazione teatraleが活発化していることに注目した。イタリア語のteatro（テアートロ）は劇場や舞台空間を表わし、時にはそこで上演されるもの（演劇、芝居、演奏、ダンス、映画など）を指して使われる。類似する語としてEducazione al teatro（テアートロへの教育）、 Educazione alla teatralità（テアートロ性への教育）などあるが、あまり明確に区別されていない。どちらも人間形成という教育の目的において、テアートロを実際の舞台に限定するのではなく、舞台の存在を、だれかが表現し、

他のだれかがそれをみるという関係性から広くとらえ、その関係性における表現行為のプロセスを重視している。一般的な「演劇教育」とせず、「舞台表現教育」としたのはこのような意図からである。本研究では舞台表現教育を専門的な教育としてではなく、一般学校における教育活動としてとらえる。これらの点を確認した上で、以後、「舞台表現教育」は原語を生かして「テアートロ教育」とする。

さて、イタリアの公教育における音楽教育理念は、学習指導要領 Programmi ministeriali scolastici（小学校1985年版、中学校1979年版）に示されたように、音・音楽を言語形態 forma di linguaggioにおいてとらえ、その意味作用を感受と表現の活動に生かすという考え方に基盤を置いている。つまり、コミュニケーション活動を通して音・音楽の言語を習得・活用し、美的感性が磨かれることを目的としている。テアートロ（舞台表現）も同じ観点からとらえられ、それは色彩や図形、声、ことば、身体、音・音楽など、様々な表現言語の共演によってスペッターコロ spettacolo（舞台表現として実践されたもの）を生成する場であると言えるだろう。イタリアのテアートロ教育は、他の表現言語とともに音楽言語をどのように生かそうとしているのか、この課題は前述の「場」の視点と関わって、音楽表現のあり方に示唆を与えると考える。

なお本研究は、文献資料と、2009年３月と５月に行った２回の現地調査に基づいている。[1]

１．イタリアの学校におけるテアートロ教育の導入ーその背景と組織づくりー

(1) 新しい学校づくり

イタリアの教育行政は1990年代に学校制度や教育内容に関する様々な問題に取り組んだが、その成果の一つとして、1997年の法律第59号[2]と1999年の大統領令第275号[3]によって、2000年９月から“autonomia”(アウトノミーア：主体性)という語に象徴される教育改革がスタートした。この“autonomia”は、各学校の実情に合ったカリキュラム編成と運営により、特色ある学校づくりを推進するものであるが、この改革の鍵は、内外の支援を生かしながら、いかに社会に開かれた学校として組織づくりできるかにある。学校内の評議会はもちろん、教育行政、スポーツ・文化・芸術振興協会などと連携を図り、学校と学校を支援する地域の主体的な取り組みが求められている。

(2) テアートロ教育の背景

イタリアでは1970年代にAnimazione Teatrale（アニマツィオーネ・テアトラーレ）[4]と呼ばれる動きが興り、テアートロ教育への関心が高まった。多くの国においてそうであるように、イタリアの学校でも学習発表会や祝祭行事、またレクリエーションの一環としてテアートロ活動が行われてきた経緯がある。また社会では、マリオネットに代表される各種人形劇など、子ども向けの演劇活動や児童劇団の育成も行なわれていた。このAnimazione Teatraleは、舞台人を養成する専門的な教育とは一線を画し、社会的、文化的、教育的レベルにおいて子どもの舞台表現活動を基礎から発展させる新しい動きであった。これら創意は、理論と実践を通してメソードを確立していったが、その実績は学校教育におけるテアートロ活動の振興に影響を与えた。[5]

1990年６月26日発令法律第162号[6]により、教育省が「健康教育」Educazione alla Saluteを全国の学校に推進する。この動きは＜プロジェクト若者93＞（Progetto Giovani 93)、＜プロジェクト少年2000＞（Progetto Rgazzi 2000）という名称の一連の教育活動として展開し、児童・青少年が置かれている社会・学校環境と心身の健康状態の改善に向けて取り組まれた。この動向は、文化・創造性の面で学校内外の教育活動を活発にしたが、特に1995年と1997年に、教育省とイタリア・テアートロ協会 Ente Teatrale Italiano（ETI)、および大学との間でテアートロ教育に関する議定書が交わされてから、学校、自治体、各種機関との連携による組織的なテアートロ教育プロジェクトが展開されるようになった。

(3) テアートロ教育を振興する２つの議定書

イタリアのテアートロ教育の振興を方向付けた２つの議定書を要約して取り上げる。

議定書<テアートロ教育に関する合意>（1995年）

Protocollo d'intesa relativa alla educazione teatrale（1995）[7]

内閣府、舞台芸術局 Dipartimento dello spettacolo、教育省、イタリア・テアートロ協会

○趣旨

- ヴァーバル、ノン・ヴァーバルな言語と創造性の教育の機会を保障する学校が、人間形成の様々な要求に応える学習形態の一つとしてテアートロ教育を推進する。
- 幼児期からの成長の過程において必要とされるテアートロ体験の、文化的水準の確保と組織化を進める。
- 政府の「健康教育プロジェクト」と連関する多様なテアートロ活動を実践する。
- イタリアで実践されてきた児童・青少年のためのテアートロ活動の豊かな実績を、学校のラボラトリ活動 laboratorioに生かす。[8]
- イタリアのテアートロの伝統を享受し、新しい創造的価値を発展させる。
- 学校教育とテアートロ専門の両方の立場が、教育という目的において合意し、継続的、組織的に連携する。
- 舞台文化に対する若者たちの関心を促進させ、美的感性を育成する。

○取り組むべき課題

- 各学校段階の教育プロジェクトProgetti Educativi d'Isitituto（PEI）の中にテアートロ活動を位置付け、児童生徒がテアートロ教育を選択できるよう制度化する。
- 児童・青年向けに上演されるテアートロの質を保証し、また若者が創出するテアートロ活動を中央と地方の行政が連携して支援していく。
- 専門性を有する学校とテアートロの両組織において、テアートロ教育の指導者を養成するため、研修制度や資料を整え、公演や実践発表などの交流の場を支援していく。
- 人材や資金を合理的で効果的に活用するための組織を整える。

議定書<舞台芸術教科目に関する合意>（1997年）

Protocollo d'intesa per l'educazione alle discipiline dello spettacolo（1997）[9]

内閣府、舞台芸術局、教育省、大学・科学技術省

○趣旨

- 情報化する文化社会に生きる若者たちは、日常生活において複雑なコミュニケーションの状況に置かれ、多様な言語に取り囲まれている。
- 人格教育には、意味とともに言語の美的側面を把握し、批評的な態度を養い、情動に対する意識を育むことが求められる。
- 表現や芸術の活動は人間形成の場を豊かにし、若者たちの心の問題と向き合うため意義ある機会を提供する。
- 演劇、音楽、映画、ダンスなど、舞台文化に対して戦略的消費状況に置かれている若者世代に、舞台文化とマルチメディア語法を教科目として専門的に学ばせる必要がある。

この議定書の趣旨は、おおむね1995年の議定書と重なるものであるが、特に高等教育や教員養成に対して、以下の取り組むべき課題が示されたことに注目する。

○取り組むべき課題

- 学校の児童生徒に特化した活動に関わる舞台教育の専門家を養成し、舞台文化を教科目として教える教員を確保する。
- 大学においては学位取得のための舞台文化専攻コースの充実化を図り、舞台文化教科目の教員養成を視野に入れる。
- 地方の自治体ならびに教育行政、各種文化振興組織、各学校、大学が連携して、テアートロ教育推進のため、教師の研修に取り組む。また同様の体制において児童生徒、学生、教師が参加交流できるようテアートロ教育プロジェクトを組織し、支援する。
- 学校教師と舞台文化に関わる専門家など、人材が連携してテアートロ教育を推進できるよう支援体制をつくる。

２つの議定書は、次の５点においてテアートロ教育プロジェクトを方向付けた。

① テアートロ活動の教育的意義
② 学校の教育計画における位置づけと制度化
③ 専門的な指導者の養成と教員の研修
④ 学校とテアートロ、両組織の人材交流と協同体制の推進
⑤ 地域における各種機関連携による支援体制の確立

２．テアートロ教育の指導者養成—サクロ・クオーレ・カトリック大学 Università Cattolica del Sacro Cuore—

2009年3月4日～6日の３日間、教員養成課程をもつサクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校の教育科学部の授業を視察した。その中から、テアートロ教育指導者養成を目的とするマスターコースのカリキュラム（2008-9年度）と授業の様子を取り上げる。

○マスターコース＜テアートロ教育—自分自身をよく知ること＞（シラバス抜粋）

Corso di perfezionamento “Educazione alla Teatralità—Consapevolezza del sé”

① コースの目的と趣旨

「学校や社会活動においてテアートロ教育に携わる指導者の養成」

急激に変化する社会にいる我々は、様々な状況において創造的な解決法をみつけてその変化に対応し、多様な言語を使ってコミュニケーションすることが求められている。子どもも大人も、学ぶ者が自分自身をよく知り、行動し、適応しながら、他者との関係を育んでいく場を支援する人材を育成する必要がある。この目的を実現する方法の一つが、テアートロである。テアートロは、創造性と表現力を育て、ノン・ヴァーバルな言語を活用しながらヴァーバルな言語の習得を助け、固有の技能や方法を通して、注意力や集中力、シンボリックなコミュニケーション能力を促進させる。

このコースでは、テアートロ教育に関わる知識理論と活動能力を習得するため、カリキュラムが編成されており、その内容は各段階の学校教育、社会教育、障害者支援に役立つものである。

② 履修内容

- 表現rappresentazioneとその活動力dinamica
- コミュニケーションとしてのテアートロ il teatro come comunicazione
- 社会・教育・文化の領域におけるテアートロ教育実践のための教育心理学
- 学校・社会におけるテアートロの教育プロジェクト

- あそびの活動 l'attività ludica
- 創造的表現を引き出すための技術
- 様々な表現方法を活用した舞台表現 azione scenicaの構成
- 身体表現、演技、人物描写を演出する舞台装置・道具、音楽、照明の創作と活用

③ 授業方法（メソード）
- ヴァーバル、ノン・ヴァーバルな言語を習得しながら表現能力を伸ばす
- 各人の潜在能力、協同作業、コミュニケーションを大切にしながら新しい表現力を引き出す
- 演劇や場面設定を生み出すアイデアや作品を、視覚的・聴覚的要素、音、文字によって構成する
- 舞台装置についての知識とその実践的運用
- テアートロ教育の実習と評価

④ 履修時間
- 理論と実践による授業：112時間
- 指導計画作成と実習：20時間
- コンピューターによる学習（On-line）：20時間

⑤ 授業計画

○テアートロのコミュニケーションLA COMUNICAZIONE TEATRALE

第１課程：テアートロ教育 ［講義］
第２課程：ノン・ヴァーバルな言語（ジェスチャーから創造的な動きへ）[講義・演習]
第３課程：ヴァーバルな言語（音・音声からことばへ）［講義］
第４課程：創造的記述（ことばから舞台作品へ）［講義・演習］
第５課程：素材の組み合わせ（物体から場面へ）［講義・演習］
第６課程：舞踊教育と動きによるノン・ヴァーバルなコミュニケーションの理論とテクニック［講義］

○心理学的・教育学的アプローチORIENTAMENTI PSCICO-PEDAGOGICI

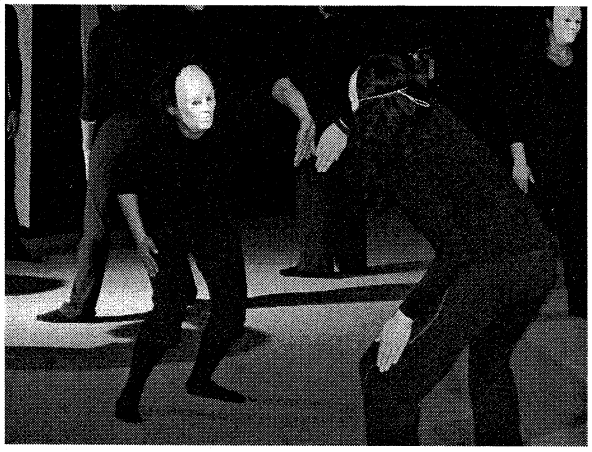
第７課程：発達段階とテアートロ教育 ［講義・演習］
第８課程：舞台表現と連動する社会的背景 ［講義］
第９課程：コミュニケーションとテアートロ教育［講義］
第10課程：イベント eventoの組織 ［講義・演習］
第11課程：オン・ライン活用 ［講義］

筆者は、オリーヴァ教授prof. G. Olivaが担当する第２課程と第10課程の授業を参観した。第２課程「ノン・ヴァーバルな言語」（ジェスチャーから創造的な動きへ）では、テアートロ教育の理念についての１時間の講義が行われた後、20名ほどの受講生はレオタードに着替え、身体の動きを静と動、テンポの緩急の中で自在にコントロールする活動に取り組んだ。その中でも白い仮面 maschera neutraを被り、二人ペアで相手の動きを模倣し、連動して動く活動は興味深かった[10]。集中力、筋力、持続力、バランス感覚を身体に養わせることは、身体表現を中心に置くテアートロ活動の基礎づくりになると理解した。

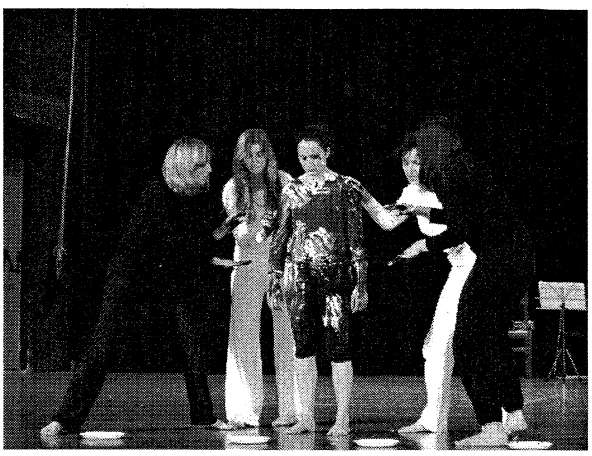
第10課程「イベントの組織」の授業はミラノ郊外のAbbiate Guazzoni市の劇場で行われ、40名ほどの受講生はグループに分かれて、試行を重ねてきた創作表現を発表した。身体、声、語り、音、種々のマテリアル（素材：絵具、段ボール箱…）、小道具（箒、鍋、ボール…）、楽器（サックス、フルート、アコーディオン、タンバリン…）、歌など、各グループは様々な要素を組み合わせて独創性を表現したが、題材、内容、構成など、表現のコンセプトがグループ内でよく共有されているという印象を持った。発表後、各グループの評価についてオリーヴァ教授と受講生たちは活発に討論していた。

筆者が参観したこの授業の受講生の約８割は、教員や障害児の支援者など教職関係者で、残りは福祉・医療関係、俳優や学生であった。このコースの授業概要から、テアートロ教育指導の方向性を読み取るこ

とができるだろう。



サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校の授業風景



同左（Abbiate Guazzoniの劇場にて）

3．ロンバルディア州ミラノ県第60学区の取り組み

(1) ロンバルディア州教育研究所Istituto Regionale Ricerca Educativa : IRRE Lombardia[11]

イタリアの教育行政は州、県、市町村単位でそれぞれ行なわれているが、これらとは別に、各州に研究や研修を目的とした機関が設けられている。ロンバルディア州教育研究所は活動の一つとして、1999年から州内の学校におけるテアートロ教育の実践状況について調査・研究し、テアートロ教育推進プロジェクトを立ち上げた。州の各地域において、学校、教師、自治体、文化振興組織、劇場の専門家などが交流・連携した活動を助成し、教員のための研修など、指導者の養成に力を注いでいる。その研究成果をまとめた2001年と2008年の刊行書とプロジェクトのサイトは、州内のテアートロ教育推進に大きく貢献している。[12]

(2) 文化協会＜少年たちのための舞台＞

Associazione Culturale "Un Palcoscenico per i Ragazzi"

文化協会＜少年たちのための舞台＞は、ミラノ県東部にある第60学区（Vimercateなど29の市町村からなる）[13]のテアートロ教育推進のために自治体の支援の下、学校教師たちによって1987年に設立された（代表prof.ssa B. Cerreda）。毎年、小中学校、高校の児童生徒が中心に参加するフェスティバルが開催される。「ラッセーニャ Rassegna」と呼ばれるテアートロ教育プロジェクトのフェスティバルは、2001年の報告によるとイタリア全国で100を数える[14]。この＜少年たちのための舞台＞のフェスティバルは「学校と社会における全国テアートロ文化振興・研究協会」（AGITA:Associazione Nazionale per la promozione e la ricerca della cultura teatrale nella scuola e nel sociale）、「テアートロ・学校フェスティバル振興会」（Co.Ra:Coordinamento Rassegne teatro scuola）、「ロンバルディア州教育研究所」の後援により開催され、2009年大会で22回めを迎えた。

offertasociale

ANNO 2009

Associazione culturale
"Un palcoscenico per i ragazzi"

Patrocinio: **AGITA**
Co.Ra coordinamento rassegne teatro scuola
ex **IRRE** Lombardia

APERTURA XXII RASSEGNA TEATRALE

con il film "DIARI" vincitore premio Cannes 2008 per il settore giovanile,
il 4 maggio, ore 20.45, sala Capitol VIMERCATE

SPETTACOLI DALL'8 AL 29 MAGGIO

presso ARCA e piazzetta di via Matteotti Mezzago, Cineteatro San Luigi Bellusco, Palestra Scuola Primaria Usmate Velate e Centro sportivo Usmate, Centro Sociale Ornago, Cineteatro San Luigi Concorezzo, TeatrOreno fraz. di Vimercate, Astrolabio Villasanta, Spazio Capitol Vimercate, Auditorium Scuola Secondaria 1° grado Sulbiate.

ELENCO SCUOLE PARTECIPANTI

Gruppo Scuole I Ragazzi di Via Concordia Comune Mezzago (MI)
Ist. Com. "Falcone Borsellino"
Sc. Prim. "A. Moro" Mezzago (MI)
Ist. Com. Sc. Prim. Bernareggio (MI)
Ist. Com. "Falcone Borsellino"
Sc. Prim. "Madre Teresa di Calcutta" Bellusco (MI)
Ist. Com. Sc. Prim. "Ai Nostri Caduti" Trezzo sull'Adda (MI)
Ist. Com. Carnate (MI)
Ist. Com. "Falcone Borsellino" Sc. Sec. I° grado Bellusco (MI)
Ist. Com. Sc. Sec. I° grado Bernareggio (MI)
I.I.S. "E. Vanoni" Vimercate (MI)
Ist. Com. Sc. Prim. "G. Leopardi" San Giovanni di Castellate (FE)
Ist. Com. "B. Luini" Sc. Prim. "S. E. Renzi" Usmate Velate (MI)

GRUPPO TEATRALE "IMPROVINCIA" (Teatrifili Milano)
Ist. Com. "B. Luini" Sc. Sec. I° grado "L. Mondolfi" Usmate Velate (MI)
Ist. Com. Massarosa I, Sc. Media "M. Pellegrini" Massarosa (Lucca)
I.S.I.S.S. Piano di Lucca, I.T.C.G. "A. Benedetti"
Liceo Scientifico "E. Majorana" di Capannori Porcari (Lucca)
Ist. Com. Sc. Sec. I° grado "E. Fermi - A. Oggioni" Villasanta (MI)
et Associazione genitori
et compagnia teatrale Saint Villaga studios di Villasanta
Scuola Teatro Ribaldo Novara
I.I.S. Liceo classico "D. Colon" Lovere (BG)
Liceo Scientifico e Classico "Majorana" Desio (MI)
Sc. Sec. I° grado "G. Puccini" Seveso (MI)
Ist. Com. Sc. Sec. I° grado "A. Manzoni" Ornago (MI)

Sc. Sec. I° grado "A. Manzoni" Vimercate (MI)
Ist. Com. Sc. Prim. "G. Leopardi" Valmadrera (LC)
Ist. Com. "A. Moro" Sc. Prim. Concorezzo (MI)
Ist. Com. "A. Negri" Sc. Sec. I° grado Cavenago Brianza (MI)
Ist. Com. Sc. Prim. "A. Manzoni" Burago di Molgora (MI)
Ist. Com. "G. Marconi" Sc. Prim. Concorezzo (MI)
Ist. Com. "G. Marconi"
— Sc. Prim. "Don Gnocchi" Concorezzo (MI)
Ist. Com. "G. Marconi" Sc. Sec. I° grado Concorezzo (MI)
Liceo Classico e Scientifico "A. Banfi" Vimercate (MI)
Sc. Prim. "Don Milani" Vimercate (MI)
Ist. Com. Renato Briantino e Sulbiate
Sc. Sec. I° grado Sulbiate (MI)

Associazione "Un Palcoscenico per i Ragazzi"
Sede legale via G. Mazzini, 102 • 20041 Agrate Brianza (MI)
tel. 039 650077 • e-mail: biancamaria.cereda@alice.it
Segreteria: cell. 333 5085667

TEATROORENO

BCC

SEGRETERIA ORGANIZZATIVA
COMUNE BELLUSCO
tel. 039 620 83 216 • fax: 039 60 20 148
e-mail: bellusco.scuola@brianzaest.it

文化協会＜少年たちの舞台＞第22回大会（2009年５月開催）のポスター

文化協会＜少年たちの舞台＞

① 活動方針

- 人格と美的感性を育て、様々な経験領域を統合するための教育実践を提案する。
- フェスティバルに参加する教師たちの交流を通して、子どもたちの生活や心身の向上、異なる文化や民族への理解、それらを推進できるよう教師たちを支援する。そのために教育とテアートロの専門家の協力を要請し、セミナーを開催する。
- 学校間の交流が発表の場だけではなく、研究や指導法の面でも促進されるよう支援する。
- 子どもや若者たちの文化を評価し、彼らが考えを自由に伝えることができ、主体となって活動できるよう支援する。
- 社会文化、心身の面で差別のない教育の機会を実現する。

この活動方針はフェスティバルの性格を特徴付けている。フェスティバルが単なる成果発表のイベントではなく、学校、子ども、教師らが交流し、表現と創造の体験を通して、他者、社会、文化について豊かな視野を養い、人間的に成長することを目指している。

② 第21回大会の参加状況

・開催期間：2008年5月9日～30日
・演 目 数：50
・参加人数：児童生徒1255人（小学生685人、中学生330人、高校生170人、その他70人）
　　教師99人、俳優・演出家・劇場関係者など31人

③ 第22回大会の参加状況と様子

・開催期間：2009年5月8日～29日
・開催場所：10の市町村11の会場（劇場、映画館、体育館など）[15]
・演 目 数：51
・参加人数：児童生徒1050人（小学生602人、中学生305人、高校生133人、その他10人）
　　教師62人、俳優・演出家・劇場関係者など22人

筆者は5月20日～23日の4日間、4つの会場で14の公演をみたが、オーケストラ演奏、ミュージカル、演劇、学習発表形式によるものなど、ジャンルは様々あった。特に高校の社会問題を扱った演劇やコメディーは、洗練された表現をみせた。その中で筆者は、「劇あそび gioco drammatico 」の要素を取り入れた小学校の舞台に注目した。

○コンコレッオ市ドン・ニョッキ小学校 3年F組 『遊んだことのないあそび』

劇の冒頭、子どもたちはパソコンに向かって座り、夢中で遊んでいるが、昔の子どものあそびの世界にアクセスする。舞台背景に絵画（ブリューゲル作『子どもの遊戯』）が映し出され、現代の子どもたちは今まで経験をしたことのないあそびの世界へと引き込まれていく。そしてドラム缶や廃材、フープ、マントなどを使って遊びに興じたり、ダンスをしたりするが、その中で各自が自分のあそびの体験を語る。そして皆で様々なアイデアを出し合って新たなあそびへと進んでいく。音楽がBGMとして場面づくりに効果的に使われ、子どもの身体能力が生かされて、自然な流れの中でドラマは進行する。

○コンコレッツォ市ドン・ニョッキ小学校 4年H組 『ÀTREBILの島』

子どもたちの乗った船が遭難し、ÀTREBIL という島に漂着する。その島で様々な苦難を経験しながら、生きるために大切なものは何かを探し求めていく。そしてÀTREBILという島の名前は、逆から読むとLIBERTÀ（自由）であることに気づく。大人が失った子どもの自由な生き方を問い直した作品である。こ

の劇の中でも木切れでフェンシングをまねたり、幅広のビニールシートを使って荒波を表現したり、また床運動の動きなども取り入れられていた。上記同じ小学校の３年F組の演技に比べると、あそびからもう１段階磨かれた身体表現や演技へと成長が見られた。どちらのクラスも、自分たちの描いた世界で、生き生きと身体やことばを通して表現するという雰囲気は共通していた。

このフェスティバルの演目のほとんどは、朝・昼と夜の２回公演の形をとっていた。朝・昼の部には、教師たちに引率された児童生徒が観客として参加する。夜の部は保護者に向けて上演される。いずれの公演も、終演後に出演した子どもたちは舞台前方に座り、観客と交流する。劇中の場面や演技、演出や解釈について観客の子どもたちから質問や意見が出され、出演した子どもたちはそれぞれ答えていく。「ラッセーニャ Rassegna」と呼ばれるイタリアのテアートロ教育フェスティバルは、この交流の時間が持たれることを特徴としている。

４．学校におけるテアートロ教育の実践

(1) 小・中学校カリキュラムにおけるテアートロ教育の位置付け

義務教育のカリキュラムの中でテアートロ教育はどのように位置付けられているかを、2009年３月に視察したミラノ県第60学区にある小学校と中学校の時間割から把握する。

ミラノ県コンコレッツォ市 ドン・ニョッキDon Gnocchi小学校 ３年F組 授業時間割 2008-9年度

	月 曜	火 曜	水 曜	木 曜	金 曜
8：30～ 9：30	*1ともに学ぼう 歴 史	*1ともに学ぼう 歴 史	体 育	*1ともに学ぼう 算 数	*1ともに学ぼう イタリア語
9：30～10：30	歴 史	算 数	イタリア語	算 数	イタリア語
10：30～11：30	宗 教	理科／情報	イタリア語	理 科	*3テアートロ・ラボラトリ
11：30～12：30	宗 教	理科／情報	イタリア語	理 科	*3テアートロ・ラボラトリ
12：30～ 14：30	給 食 あそび	給 食 あそび	給 食 あそび	給 食 あそび	給 食 あそび
14：30～15：30	算 数	英 語	*2表現ラボラトリ	読 書	地 理
15：30～16：30	算 数	英 語	*2表現ラボラトリ	イタリア語	算 数

＊1授業名Accoglienza：歓迎の意。重度の障害児との活動
＊2授業名Laboratori Espressivi：オープンクラスによる音楽、図画、工作、モザイク、版画、粘土、人形芝居、ダンスなどの活動
＊3授業名Laboraorio Teatrale：このラボラトリ名はクラスによって異なる。このクラスの場合はテアートロ活動を行う。

ミラノ県オレーノ市 ドン・ゼノ Don Zeno中学校 1年F組授業時間割 2008-9年度前期（9月8日～1月31日）

	月 曜	火 曜	水 曜	木 曜	金 曜
8：00～ 8：55	*1技術	*1技術	イタリア語	スペイン語	*2地理-英語
8：55～ 9：50	体 育	宗 教	イタリア語	スペイン語	*2地理-英語
9：50～10：55	体 育	科 学	イタリア語	数 学	美 術
10：55～11：50	数 学	数 学	数 学	英 語	美 術
11：50～12：45	科 学	イタリア語	音 楽	イタリア語	歴 史
12：45～13：35	歴 史	英 語	音 楽	イタリア語	地 理
	昼 食		昼 食		
14：30～	*3ラボラトリ		*3ラボラトリ		
16：10	*3ラボラトリ		*3ラボラトリ		

＊1授業名 Tecnologia　＊2授業名Geo/English：地理と英語の合科目
＊3授業名 Laboratori：新聞、情報、ダンス、テアートロなど選択制

小学校、中学校ともに「ラボラトリ」と呼ばれる教科の枠を越えた、特色ある授業時間が設けられている。小学校の場合、「表現ラボラトリ」という時間に音楽、図画工作、ダンスなど、創作や表現と関わる活動が行われている。ドン・ニョッキ小学校３年F組の場合、この「表現ラボラトリ」とは別に、「テアートロ・ラボラトリ」の時間が組まれている。これはこのクラスの担任教師、ペナーティC. Penatiが学校の評議会に要望を出し、承認されて実践している授業である。承認にあたっては教師の指導力と経験が問われるが、ペナーティ教諭は研修会に参加するなど研鑽を積み、20年以上テアートロ教育を実践している。

中学校のラボラトリは選択性で、その中でテアートロ活動が計画されている。またドン・ゼノ中学校１年F組の場合、時間割に示された「Geo／English」は地理と英語の合科目であるが、この授業でもテアートロ表現が取り入れられ、地理と英語両方の学習内容に生かされていた。

(2) ドン・ニョッキ小学校におけるペナーティとヴァレーラの実践（2004-5年度の指導計画・記録より）[16]

コンコレッツオ市のドン・ニョッキ小学校はテアートロ教育に熱心に取り組む学校の一つである。2009年5月の＜少年たちのための舞台＞フェスティバルに、全校10クラス中３クラスが参加している。この小学校でテアートロ教育を担当する二人の女性教師、ペナーティC. PenatiとヴァレーラA. Valeraの指導計画・記録（2004-5年度）の内容から指導方法をとらえる。

テアートロ活動の理念と指針（筆者要約）

① 話し方を身につける Recupero dell'oralità

テアートロをすることは話し方を身につけることであり、コミュニケーションの基盤となることばの働きを学ぶことになる。話し方は全身を使い、社会性や情操と関わって、経験から組織された記憶を再確認する。テアートロ教育においては、話し方によってエピソード、物語、詩などの言語表現が磨かれる。

② 物語ることと教育 Narrazione ed educazione

テアートロ表現の基本は物語る経験である。情報優位、大衆文化の影響下にあって、語り方や聞き方を学ぶことはますます大切である。学校は、論理や知識だけを教える場ではなく、物語の思考力に関心を示し、子どもたちが他者と柔軟な関係を築き、開かれた自己を形成できるよう、語り合う共同体とならなければならない。テアートロに参加することにより、子どもたちは自分を語ることを学ぶ。テアートロは語ったり聞いたりする欲求を引き出し、その相互経験の場と時間である。

③ 儀式性 La ritualità

集団行動においてテアートロの儀式的性格は大切な役割をもち、集団の一員として常に自己成長を促し、それが子どもたちには社会性と関わる経験となる。テアートロの視点から、我々の存在はシンボリックな形として、また学校という空間はシンボリックな行動の場として把握される。

④ テアートロのあそびの性質 La dimensione ludica del teatro

テアートロ活動は私たちを遊戯の次元に導き、あそびの活動力を認識させる。あそびはイメージとシンボルを通して思考力を育て、情動的経験を深める。あそびに基づいたテアートロ活動は、身体からはじまる創造的体験である。

⑤ 芸術教育の意義 Il valore formativo delle arti

学校にテアートロ活動を取り入れることは芸術性と触れることになり、全人教育における芸術の価値を認識させるだろう。そして認知的な要素と情緒的な要素は、個人やグループの体験を通して、教育という目的において一つにまとまる。

⑥ 協同性 La cooperazione

テアートロ活動はグループに役割分担・協同一致の行動を促進させ、グループ活動は社会性を身につけさせる。また、この活動において学習を進めるのは子どもたち自身である。子どもたちは互いに助け合い、意見交換し、学びあいながら社会的に成長する。

プロジェクト＜テアートロ教育＞　３年F組

（テアートロ・ラボラトリの授業を中心とする活動に１年間クラスで取り組む）

①　目標

ドラマ表現であるテアートロ活動を通して、認知、情緒、感覚、運動、美的感性とかかわる幅広い学習の可能性を追求する。

②　活動内容

- グループ活動の意味を知る
- 身体を感じる（呼吸、リラックス・緊張、形状を表現する体）
- 他者の表現を積極的に聞く
- 時間と空間の連関性に反応する
- 身体の表現・伝達の方法を、空間やリズムとの関係において知覚する
- 自己と他者の関係において情動 le emozioniや感情 i sentimentiを認識する
- 集中力と自制心を養う
- 楽しんで自分の体験や想像したことを話す
- 想像力と創造力を伸ばす
- テアートロの表現方法から有用な技能を身につける

ドラマづくりの工程

【第１段階】

子どもたちが即興的に話したり表現したこと、物語や詩、動きやジェスチャーなど、また子どもたちが興味を持った音楽や画像などを収集する。

【第２段階】

第１段階で収集したものの中から、グループにとってより意味のある題材を選んでいく。それらは子どもたち一人ひとりがイメージしやすい内容のもので、シンボリックで情動的な性質をもつものである。題材の内容はより明確になるよう修正されていくが、この段階において子どもたちは作り手と受け手の立場になって、効果的に伝わる表現になるよう試行する。

【第３段階】

上演用の筋書きを決定する。そして台本が詳細に作られていく。このとき教師は、全員が主人公になって台詞が言えるように、子どもたちをストーリーの中に統合していく。

【第４段階】

本番の舞台に向けて劇全体を練習する。その中で、障害をもつ子どもがどのように参加できるかを考え、子どもたちは表現内容や動きを工夫していく。

ペナーティとヴァレーラの指導法は一貫して「身体反応・表現」と「ドラマづくり」[17]の２つの局面から進められている。これら活動において、子どもが持っている身体感覚や想像力を生かし、表現力を養いながらドラマが創り上げられていく。同時にテアートロ活動によって豊かな人間関係を育みながら、子どもたちは社会的に文化的に成長していくということが理解できる。

筆者がこの小学校の４年H組のテアートロ活動を参観したときは、フェスティバルの直前であったが、子どもたちが集団の中で自立した表現者として行動していると感じた。指導者にそのことを伝えると、「はじめはそうじゃなかった」という言葉が返ってきた。普段の授業からフェスティバルに至るドン・ニョッキ小学校の一連の過程で、俳優・演出家のフィオッキ氏M.Fiocchiがアドヴァイザーとして関わっていた。テアートロの専門家が教育現場をよく理解し、教員と協力して子どもの表現活動を支援することの意味は大きいと、結果を見て感じた。

5．イタリアのテアートロ教育が示唆するもの

(1) イタリアのテアートロ教育の検討

これまで見てきたように、イタリアの学校・社会においてテアートロ教育は、言語的（ヴァーバル、ノン・ヴァーバル）表現による創造性とコミュニケーション能力の育成、美的感性や情動性と関わる人間形成という点において共通認識されている。学校が地域社会に開かれた環境の中でこのプロジェクトが進められ、地域が文化的教育活動を支える力となっていた。

テアートロ活動は、子どもの表現力を総合的に育成する教育実践であり、表現・伝達の場を経験しながら、子どもたちは様々な表現言語を段階的に磨いていく。この活動の中で音・音楽も表現言語の一つであり、身体の反応や表現を引き出す指導の場で、音楽やリズムは欠かせない要素として活用されていた。

一方＜少年たちの舞台＞のフェスティバルでみた公演では、コンサートやミュージカルなどの形式を除いて、音楽の使われ方は、劇中に挿入される歌や演奏はあったものの、いわゆるサウンド・トラックが主流で、場面や動きを特徴づけるために用いられていた。しかし感情やイメージを、身体の動きやことば、様々な素材や演技で表現するように、子どもたちが音・音楽を、自分たちの表現言語として創造的に活用するという場面はみられなかった。イタリアのテアートロ教育の創意の中で、子どもたちの自発的な表現としての音・音楽の表現言語の育成がどうとらえられているのか、それを見究めていくことが今後の課題である。

イタリアのテアートロ教育から学ぶことは、舞台発表という結果においてではなく、そこに至るプロセスにおいて、情動・認知・表現・コミュニケーションという局面を相関的にとらえ、子どもの表現力を段階的に引き出していくところである。それは私たちが、教室や学校という空間の中で子どもたちの音楽表現を引き出すときに、少なからず示唆を与えると思われる。

(2) あそびの活用

＜少年たちの舞台＞のフェスティバルで観た小学生の舞台で、「劇あそびgioco drammatico」[18]の形式が取り入れられていたことは特筆すべき点である。これら舞台を観て、指導者たちと話し合った経験から、筆者は劇あそびを取り入れた実践を次のようにとらえている。

> 舞台上でグループ（ここではクラス）全員が常にいっしょに活動し、子どもたちは設定された場面の中で自発的に行動しながら、それが一つのドラマとして展開する。完全な即興劇ではないが、あそびが即興的表現を引き出し、効果的に使われる様々なマテリアル（道具や素材）や音楽が、身体表現とコラボレーションする。ストーリーは子どもたちの合意にもとづいて展開していくが、題材は、空想の世界や探検、あるいは子どもの日常そのものであったりする。筋書きや脚本は、子どもたちの創意により年間の活動を通して作り出されたものであり、舞台上での動き、演技、台詞などは子どもの体験や想像にもとづく自然な表現である。

このようにあそびの要素は幼児教育のみならず、小学校の表現活動にも有効に生かされる。オリーヴァ教授が提示する次の図１では、人間の身体と精神が持つ潜在的な能力が、自然な表現力として現われ、指導や学習を通して表現方法を磨きながら、舞台表現へと進展する方向が示されている。「劇あそび」はまさに、自然な表現力とテアートロを結ぶ表現活動であると言えるだろう。

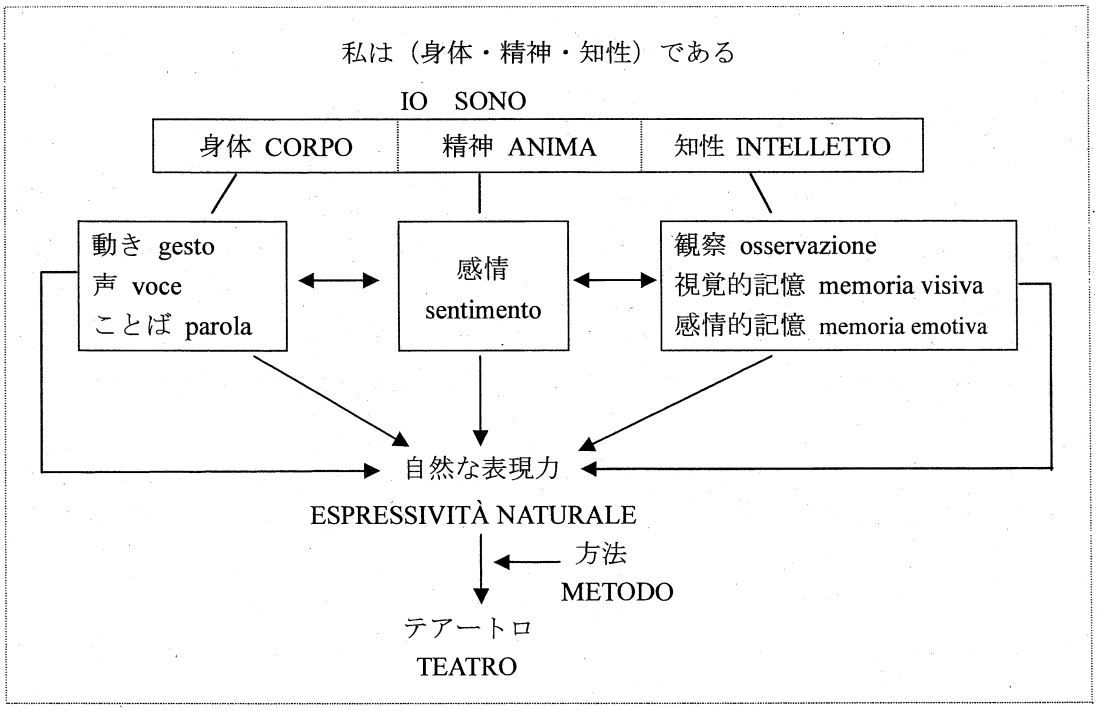


図１　OLIVA,G.(1999a), Il laboratorio teatrale, LED, Milano, p.98

⑶　わが国の音楽科教育の課題　―新学習指導要領における「思いや意図」と関わって―

平成20年１月の中央教育審議会答申において、小・中学校及び高等学校の音楽科の基本方針が示され、その中で「思いや意図をもって表現したり、味わって聴いたりする力を育成すること」と述べられた。教科書を例にみると、従来から「情景を思い浮かべて」「詩の内容を感じとって」というように、感受した内容が表現に生かされるよう求められてきた。しかし実際に感じとったこと、イメージしたこと、この「思い」の内容を「意図」によってどう表現されるのかといった関連性がつかみにくく、時には心情面だけが先行してしまっていないだろうか。

これまで見てきたようにイタリアのテアートロ活動では、身体と心で感じたこと（思い）を、視覚的に聴覚的にどう伝え、表現するか（意図）、それを実現するための方法を獲得することが目標の一つであった。情動的に認知したことを身体的、言語的の２つの局面から表出するプロセスが重視され、それがドラマづくりへと集約されていた。このテアートロ表現の枠組みから音楽表現をとらえると、「思いや意図をもって表現する」の方向性が見えてくるのではないだろうか。

このような考えから筆者は、2009年７月に＜思いや意図をもて表現する＞と題して、神奈川県小学校教員研修を行った[19]。この研修で教師たちはグループに分かれ、１つの題材（水、風など）を身体と音・音楽の２つの方向から表現をするという試みに取り組んだ。身体・物的素材による視覚的アプローチと、音・音楽による聴覚的アプローチを協同させることで、対照的に表現の意図がみえてくる効果があったのではないかと考える。この実践はまだ試行の域を出ないが、発展の可能性を探っていきたい。

さて音楽科教育では、知識理解、技能習得を学習の根幹としながら、感受と表現の両面において感性を磨き、表現能力を高めていくことが求められている。また音楽の表現活動は、集団において他者との関わりの中で、互いに触発し合いながら発想力や表現力を高めていく。そこで大切なことは、ともに学ぶ共同体の中で個と全体が差異や共通性を認識しながら、いかに共感し、表現内容を共有できるかということである。日本の小学校の音楽の授業では、低学年では「あそび・参加型」の学習形態が生かされるが、学年が上がるにつれて「テキスト解釈・表現追求型」へと移行する傾向があるように思う。「あそび・参加型」をある発達段階に限定せず、集団と個の表現を生かすためにもっと幅広く活用できないだろうか。本研究動機で述べた「２つの場」という視点と重なって、情動、身体、表現をつなぐイタリアのテアートロ教育

の理念と実践から学ぶことは少なくないはずである。

6．おわりに

本論ではイタリアのテアートロ教育の現状をロンバルディア州の事例からとらえ、その理念を把握するとともに、指導実践から表現教育のあるべき方向を探求した。理念と実践の両面でイタリアのテアートロ教育メソードは種々あると容易に推測され、併せてスタニスラフスキーやグロトフスキーをはじめとするヨーロッパ演劇界の巨匠たちのメソードの影響も考慮されなければならないだろう。また、感情や認知と関わる諸学の理論との関連性からも、表現のプロセスについて理解する必要があるが、これらは今後の課題として残される。

イタリアのテアートロ教育は各組織の連携によって振興されているが、筆者は活動家たちと出会って、むしろそれぞれの部署に情熱と創意をもった人が働いていて、その人と人のつながりが組織を動かし、プロジェクトを支えていると感じた。

昨今わが国では、学校、地域における青少年教育のあり方、「生きる力」を養うコミュニケーションや感性・情緒と関わる体験的活動、教員の資質能力の向上など、学校や社会で様々な課題の充実化が求められている。それらに応えるためにも、本研究を継続的に発展させていきたいと考える。[20]

注

[1] 本研究は2008年度と2009年度の科学研究費助成による。研究課題名「イタリアの学校・社会における舞台表現教育の取り組みと音楽表現の関わりについて」、基盤研究(C)、研究課題番号：20530807
2009年3月にはロンバルディア州教育研究所（在ミラノ）、サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校、テアートロ研究センター（Centro Ricerche Teatrali, 在 Fagnano Olona），2009年5月にはミラノ県第60学区小中学校3校、文化協会＜少年たちの舞台＞のフェスティバルを視察した。

[2] Legge 1997, n.59, art.21

[3] D.P.R.1999, n.275

[4] BENVENUTI(1994) pp.163-184, PERISSINOTTO(2001) pp.28-29
Animazione は社会的・文化的側面からグループや個人の学びや成長を支援する組織的活動。フランス語の Animation と同義である。

[5] Animazione Teatrale の主な活動家として、M.Lodi, R.Rostagno, F.Passatore, G.Scabia, M.Gagliardi, L.Perissinotto, F.Sanfilippo らの名が挙げられる。BENVENUTI(1994), ibid.

[6] Legge 1990, n.162

[7] IRRSAE Lombardia(2001) pp.209-210

[8] 本論４（１）参照

[9] IRRSAE Lombardia(2001) pp.211-213

[10] オリーヴァ教授はこの活動に、ポーランドのグロトフスキーJ.Grotowski（1933-）のメソードを取り入れている。

[11] ロンバルディア州教育研究所は Isitituti Regionali per la Ricerca,la Sperimentazione,e l'Aggiornamento:IRRSAE Lombardia として1979年に設立、2001年に Istituti Regionali di Ricerca Educativa:IRRE Lombardia と改称、さらに2008年から Nucleo territoriale della Lombardia-Agenzia Nazionale per lo Sviluppo dell'Autonomia Scolastica となったが、ex IRRE が通称となっている。

[12] IRRSAE Lombardia(2001)と IRRE Lombardia(2008)は、このプロジェクトを指揮する Rosa Di Rago 研究員が編集。プロジェクトのサイト：www.irre.lombardia.it/teatroscuola/

[13] この第60学区29の市町村の規模は、１市町村の人口が平均１万人ほどで、各市町村に開校されている学校の数も小中学校各１～２校程度である。

[14] Ministero della Pubblica Istruzione 他(2001)

[15] Mezzago, Bellusco, Usmate, Usmate Velate, Ornago, Concorezzo, Vimercate, Villasanta, Sulbiate, Oreno の各市町村

[16] この授業実践はロンバルディア州教育研究所の助成を受けた。

[17] 本論では取り上げなかったが、「ドラマづくり」はサクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校教育科学部の授業でも重視されていた。参観した「ドラマトゥルギー」の授業で、学生たちは［ことば Parola → 文 Frase → 詩 Poesia → 物語 Racconto → 脚本 Canovaccio → ドラマ・劇 Dramma］の一連の創作活動に取り組んでいた。授業者オリーヴァ教授は、常に「想像力 immaginazione」と「 ファンタジー fantasia」の 2 語を繰り返して、学生たちの創作力を喚起していたのが印象的である。

[18] PERISSINOTTO (2000) p.28, OLIVA (1999b) pp.57-59

[19] 「確かな学力を育む教科指導研修講座 6　小学校音楽」（神奈川県総合教育センター主催、2009 年 7 月 27 日）

[20] 中央教育審議会
- 今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）2006 年 7 月 11 日
- 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）2008 年 1 月 17 日
- 新しい時代に求められる青少年教育の在り方について（諮問）2008 年 4 月 18 日

【引用・参考文献】

BENVENUTI, P.(1994), *Introduzione alla Storia del Teatro-Ragazzi*, La Casa Usher, Firenze.

IRRSAE-Lombardia(2001), *Il Teatro della Scuola,Riflessioni, indagini ed esperienze*, FrancoAngeli, Milano.

IRRE-Lombardia(2008), *Emozionalità e Teatro, Di pancia, di cuore, di testa*, FrancoAngeli, Milano.

Ministero della Pubblica Istruzione, ETI, AGITA, ERT-Friuli Venezia Giulia(2001), *Geografia del Teatro Scuola in Italia -Le Rassegne di Teatro Studentesco-*,Leonardo Editrice, Udine.

OLIVA, G.(1999a), *Il laboratorio teatrale*, LED, Milano.

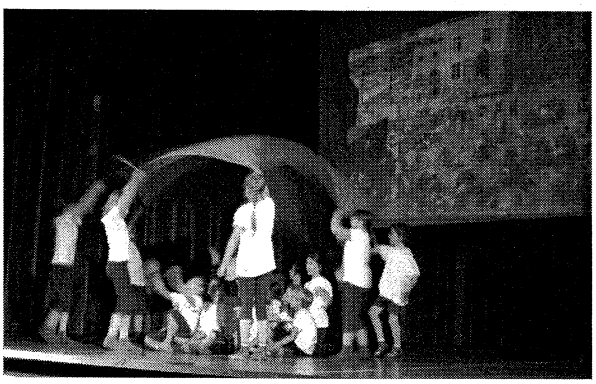
OLIVA, G.(1999b), *Il teatro nella scuola*, LED, Milano.

PERISSINOTTO, L.(2001), *Teatri a Scuola-Aspetti Risorse Tendenze*, UTET, Torino.

VALERA, A., PENATI. C.によるドン・ニョッキ小学校「テアートロ教育」指導計画・実践記録（2004-5年度）

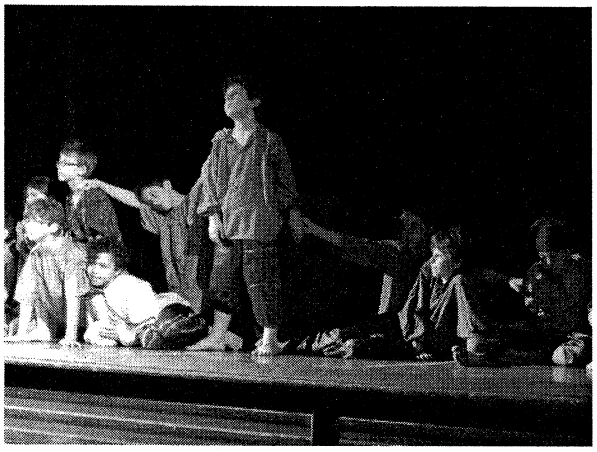
中嶋俊夫（2007）「音楽的体験を共有する場づくりへのアプローチ—初等音楽科教育法授業における学生の取り組みと意識調査を通して」『横浜国立大学教育人間科学部研究紀要 I 』教育学 第9集 pp.119-137.

文化協会＜少年たちの舞台＞第22回大会（2009年５月）

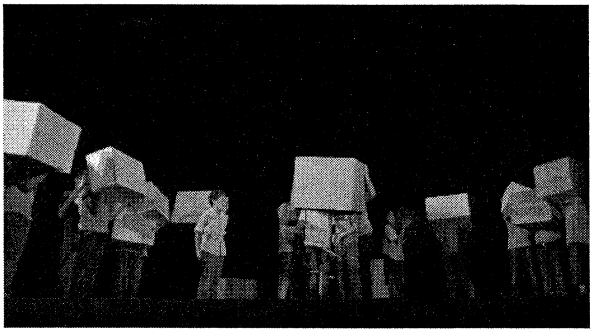


Don Gnocchi 小学校（Concorezzo市）３年
『遊んだことのないあそび』

同左　カーテン・コール



Don Gnocchi 小学校４年『ÀTRBILの島』



A.Moro 小学校（Mezzago 市）５年
『大変、成績簿が消えちゃった！』

G. Marconi 小学校（Concorezzo 市）５年
『空をとんでやってきた』

終演後、客席からの質問に答える出演した子どもたち